

系 車

編集 山形村ふるさと伝承館



黒川堰取水口（昭和14年12月発行の『黒川堰工事竣工記念帳』より）

山形村と水

田畑には灌漑用水が供給され、水道の蛇口をひねればいつでも清潔な水が出てくる。こんな日常の風景も、数十年前までは考えられない事でありました。

村には大きな河川がないため、古来より水利に恵まれず、水を獲得するために多くの労力と情熱が注ぎ込まれました。それが黒川堰であり、また唐沢川を水源とする上水道があります。村内には、こうした水をめぐる苦勞を物語る書類が残されていますが、これも貴重な文化遺産であります。未永く受け継ぐことで、水のありがたさも次世代へ継承していきたいものです。

伝承館に収蔵されている「水」に関連した文書

ふるさと伝承館では、非現用となった役場文書の中から、村の歩みを知る上で欠かせない文書を「歴史資料」として引き継ぎ保管しています。この中から水に関連した文書をご紹介したいと思います。

黒川堰（くろかわせぎ）

竹田地区を流れる唐沢川は、村の貴重な水源ですが、その流量は決して豊富でなく、竹田地区に広く黄金色の稲波を躍らせるに足るものではありませんでした。それ故、粟や稗を常食とする畑作地帯で、俗に「竹

田の粟飯」と揶揄され、米の飯を食べたいというのが農民の悲願でありました。この願いを叶えるべく黒川堰の掘削が始まったのであります。

黒川は梓川の一大支流で、鉢盛山の北斜面から流出し、波田町の山地を貫流して竜島で本流に合流している河川です。この黒川の水を引いてようと計画したのですが、完成までには幾多の苦労と挫折がありました。最初に計画されたのは、安政六年（一八五九年）のことで、上波田の中嶋喜右衛門らにより着手されましたが、あまりの難工事ゆえ資金難に陥り、放棄されてしまいました。そして明治十一年、竹田の百瀬三郎平ら有志八名が引き継ぎ、幾多の難題を乗り越え明治二六年に初通水したのです。

波田町の上波田・中波田・下波田および山形村の上竹田・下竹田を灌漑しましたが、水の絶対量が少なかったために、水見人を各分水箇所に置き、公平に各地区へ水配されました。二四時間体制で水配したので、真夜中の作業も常だった様です。ま



▲ 伝承館所蔵の黒川堰関連文書

た厳しい山腹を通した水路であったため、大雨の際には決壊することもあり、その維持には随分苦勞させられたとの事です。なお昭和四六年、中信平農業水利事業により、梓川の水に水源をかせ、黒川堰はその役目を終えています。

さてこれらのことは、古老からの言い伝えに加え、残された文書が物語ります。伝承館には、黒川堰普通水利組合が結成され、当時の村長が管理責任者とされた明治三八年頃以降の文書が残されています。それ以前の文書は、当時からかきわりのあった村内各戸に存在していると思われるものです。これらすべてが、山形村と水を

めぐる格闘を、後世へと確実に伝える貴重な文化遺産と言えます。（この文章作成にあたり、黒川堰土地改良区が平成八年に発行した『黒川堰』を参考にさせていただきました。）

水道

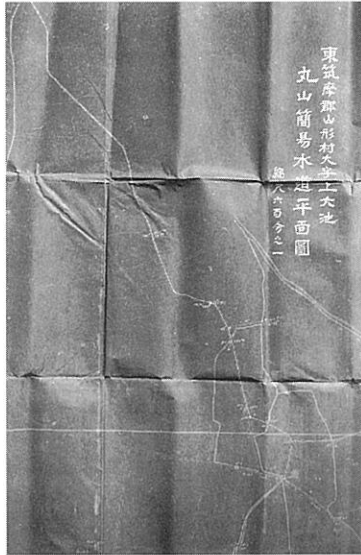
山形村に初めて水道が引かれたのは昭和五年のことである。これは上大池、小坂の約百戸に引かれていた丸山簡易水道で、村営水道が完成し、村内各所へ水道が引かれた昭和三四年に先立つ。

丸山簡易水道は、小坂の小林安視神主らの発起により、僅か百戸たらずの水道組合（代表者…大池勝治）が設立され工事が進められた。工費は一一六八六円で、内一四六〇円の県費補助を除けば、組合員自らの負担で、一戸当の負担金は百円であった。当時の日雇人夫賃が一日五十銭だと言うので、その金額の大きさが分かる。また工事は、大方組合員の勤勞で行われたと言われ、住民の苦勞は大変なものでありました。

伝承館には昭和五年五月に提出された竣工関係書類があり、配管の平面図が同封されている。これを見ると、取水口は小坂から清水寺へと登る途中のアマコエ地籍で、ここから配水池を経由して、小坂の山麓側一部と上大池の北側一部へ配管され、消火栓も設置されている。

なお昭和四五年には村営水道へと統合され、今はこの水源も使用されなくなったが、当時の配水池が現存し、その前には記念碑が建立されている。

さて他の地域の生活用水と言えば、井戸水や僅かな湧水、そして沢の流水が使われた。特に竹田地区は、唐沢川の流水が主として使われたが、伝染病など、公衆衛生上好ましいものではなかった。また雨が続けば濁水となり、飲み水に難儀したとも



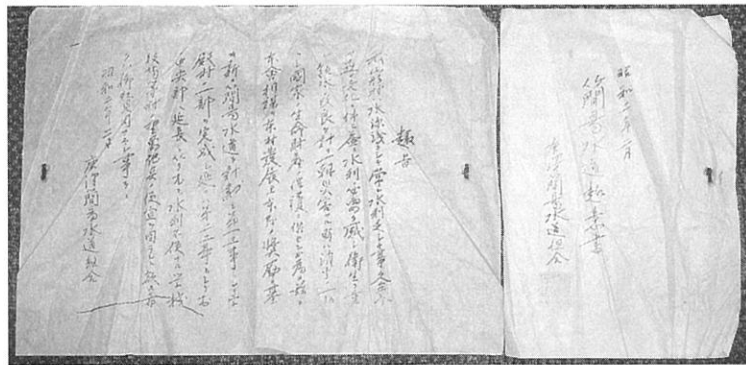
▲ 丸山簡易水道配水池と記念碑

言われる。そこで井戸の掘削も推進されたが、この地区は地下水位が深く掘削が困難であった。こうして水道の敷設は住民の悲願となり、村の重要課題に位置づけられた。

その発端であろうか伝承館には、昭和二年二月に、唐沢簡易水道組合から提出された、簡易水道趣意書が残されている。公衆衛生上、また火災時の消火のため、唐沢川を水源とする簡易水道を敷設したいゆえ、御賛同願いたいと記されている。結局この願いは叶わなかったが、約三十年後の村営水道完成まで、その悲願は引き継がれたと想像される。

昭和三四年、唐沢川を水源とする村営水道が完成し、住民の悲願は果たされた。ここに至るまでは、幾度とない難題と挫折を乗り越えてのことで、昭和三三年には、村長及び村会議員の辞職問題にまで発展したは

丸山簡易水道平面図



▲ 唐沢簡易水道趣意書

ど紛糾した。このすべてを語る文書は伝承館にはないが、当時発行されていた公民館報に詳しい記述がある。今では下水道の普及により、唐沢川の水だけでは不足が生じたため、奈良井川を水源とする松塩水道用水から水を買っている。蛇口をひねれば水が流れるのは当たり前のこととなったが、節水に心がけ、水資源を大切に使用したいところだ。

水害

水のない村で、一滴であっても水は貴重ですが、一時に有り過ぎてはとんだ災いをもたらします。

戦後の水害を拾ってみると、昭和二十年に堂ヶ入沢で、二名の消防団員が殉職されたことで記憶されている土石流災害。三四年の伊勢湾台風による災害。そして記憶に新しいところでは、五七年の台風一八号、五八年の台風十号と二年続きの水害などがあります。

伝承館には五七年と五八年の水害に関する書類や写真が残されており、その被害状況から復旧に至るまでの状況が分かります。忌まわしい記憶



▲ 昭和58年の水害（下竹田唐沢）

ではありますが、過去の災害の状況を把握すると、これからの防災に役立つことが多々あります。どの場所を警戒したらよいか、どの場所の守りを固めたらよいか、どの場所に避難勧告をした方が良いかなど、判断材料になります。

文書の保存を今一度

比較的昔ながらの農村風景が残っている我が村ではありますが、最近では昔ながらの家や、蚕室として使っていた建物の取り壊しや建替え等、家並みもだいぶ様変わりしてきた様に感じられます。こうした折によく耳にすることに、昔の文書類は全部燃やしたと言うことです。もちろんその家のプライバシーに関するものが多いとは思われますが、村の歩みを知る上で重要な文書まで燃やしていることもあるのではと危惧されます。特に古文書の範疇には入らない様な、明治・大正・昭和の文書は、何の疑いもなく捨てられているのではないのでしょうか。

この時期に村は、急速な変革、発展をしたのであり、資料が無くなることは、大きな損失だと言えます。文書に限らず建造物等の近代化遺産も含め、保存と活用策を考えていくことが重要だと思われれます。

平成十六年度歴史講演会

「山形村の山城を探る」

が開催される

九月四日(土)に、ふるさと伝承館主催(後援・山形村史談会)の歴史講演会が開催されました。今年はず中世(鎌倉・戦国時代)に各地に作られた山城をテーマに取り上げました。講師に岡谷市にお住まいの宮坂武男先生をお迎えし、山城に関する歴史的背景や、山形村に存在する「秋葉城」、「小坂城」、「池の入城」について熱心にご講演下さいました。先生は長野県内の山城を踏査するな



▲ 当日の会場の様子

かで、こうした山城にかかわらず、地元の地名や伝承を知る人が少なくなってきたおり、文化財が危機に瀕していると語られ、より多くの人に関心に向けてもらいたいと話を締めくくられました。当日は約五十名が聴講にご来場くださいました。

なぜ山城が作られたかということですが、室町時代の中頃には、幕府の権威が弱まってきた為、各地で戦

乱が続くようになり、地方の有力者たちは山城や砦を築き自分の領地を警備するようになったからと考えられています。松本城・天守閣の様な立派な建物は無かったでしょうが、山形村にも「城」と呼ばれるものがあったことは、あまり知られていないところだと思います。山形村には上記の三ヶ所に加え、朝日村境にある「旭城」の四ヶ所が存在します。



▲ 山形村内の山城 位置図